

2021.9.5

説教「祝福と呪いの間で」松村光司

聖書 創世記 27章 1-17節

27:1 イサクは年をとり、目がかすんで見えなくなってきた。そこで上の息子のエサウを呼び寄せて、「息子よ」と言った。エサウが、「はい」と答えると、2 イサクは言った。

「こんなに年をとったので、わたしはいつ死ぬか分からない。3 今すぐに、弓と矢筒など、狩りの道具を持って野に行き、獲物を取って来て、4 わたしの好きなおいしい料理を作り、ここへ持って来てほしい。死ぬ前にそれを食べて、わたし自身の祝福をお前に与えたい。」

27:5 リベカは、イサクが息子のエサウに話しているのを聞いていた。エサウが獲物を取りに野に行くと、6 リベカは息子のヤコブに言った。「今、お父さんが兄さんのエサウにこう言っているのを耳にしました。7 『獲物を取って来て、あのおいしい料理を作ってほしい。わたしは死ぬ前にそれを食べて、主の御前で前を祝福したい』と。8 わたしの子よ。今、わたしが言うことをよく聞いてそのとおりにしなさい。9 家畜の群れのところへ行って、よく肥えた子山羊を二匹取って来なさい。わたしが、それでお父さんの好きなおいしい料理を作りますから、10 それをお父さんのところへ持って行きなさい。お父さんは召し上がって、亡くなる前にお前を祝福してください。」11 しかし、ヤコブは母リベカに言った。「でも、エサウ兄さんはとても毛深いのに、わたしの肌は滑らかです。12 お父さんがわたしに触れば、だましているのが分かります。そうしたら、わたしは祝福どころか、反対に呪いを受けてしまいます。」13 母は言った。「わたしの子よ。そのときにはお母さんがその呪いを引き受けます。ただ、わたしの言うとおりに、行って取って来なさい。」

14 ヤコブは取りに行き、母のところを持って来たので、母は父の好きなおいしい料理を作った。15 リベカは、家にしまっておいた上の息子エサウの晴れ着を取り出して、下の息子ヤコブに着せ、16 子山羊の毛皮を彼の腕や滑らかな首に巻きつけて、17 自分が作ったおいしい料理とパンを息子ヤコブに渡した。

○はじめに

おはようございます。今日も共に礼拝できることを感謝します

イサクはすっかり年をとり、いよいよ自分の祝福を子どもに引き継ぐときとなりました。イスラエルでは長男が家を継ぐのが伝統です。イサクには双子の兄弟がいましたが、わずかに先に生まれた長男エサウを呼び寄せて、祝福を引き継ぐために食事を準備するようにと伝えるのです。エサウは狩りが得意でした。そしてイサクはその獲物を食べるのがお気に入りだったのです。エサウは早速、狩りにでかけたのです。

そんなイサクとエサウのやり取りに気づいたのはイサクの妻リベカでした。リベカはこのことを知ると次男のヤコブに言うのです。すぐ、家畜の中から子羊を取ってきなさい。それで料理を作るから、お父さんに食べさせなさい。そうすれば、お兄さんではなく、あなたが祝福をいただけ

るから。

そんなことしてバレたら、自分は呪われてします。躊躇するヤコブに、リベカはいうのです。そのときは私が呪いを引き受けます。そしてイサクにバレないように、エサウの服をヤコブに着せ、腕に羊の毛をまきつけて、ヤコブを送り出すのです。

○その後のヤコブとエサウ

ヤコブは兄エサウのふりをしてイサクに料理を持っていきました。彼はどうなったでしょうか。あまりにも料理が早いので、イサクは少し怪しみましたが、エサウの服の匂いをかいで、腕をさわって、すっかり弟ヤコブを兄エサウだと思いこんでしまいます。そして食事に満足して、イサクはヤコブに手をおいて、彼自身の祝福を譲ってしまうのです。

狩りから返ってきた兄エサウは、自分ではなく弟が祝福されていることを知って、怒り、泣き叫びます。このとき兄は自分が失ったものの大きさに気づくのです。。

創世記 27章 36～28節を読みます。

27:36 エサウは叫んだ。「彼をヤコブとは、よくも名付けたものだ。これで二度も、わたしの足を引っ張り（アーカブ）欺いた。あときはわたしの長子の権利を奪い、今度はわたしの祝福を奪ってしまった。」エサウは続けて言った。「お父さんは、わたしのために祝福を残しておいてくれなかったのですか。」27:37 イサクはエサウに答えた。「既にわたしは、彼をお前の主人とし、親族をすべて彼の僕とし、穀物もぶどう酒も彼のものにしてしまった。わたしの子よ。今となつては、お前のために何をしてやれようか。」27:38 エサウは父に叫んだ。「わたしのお父さん。祝福はたった一つしかないのですか。わたしも、このわたしも祝福してください、わたしのお父さん。」エサウは声をあげて泣いた。

○正しいことはなにか

祝福を横取りしてしまったヤコブの物語。私たちはこの物語に、少し戸惑いを感じます。なぜなら神様から受ける良いもの、そう思っている祝福が、人を騙すことで手に入る物語だからです。祝福を得るために、不正なことをしてもよいのだろうか？特に、外からこの物語を読むと、兄のエサウに同情してしまう人もいるのではないのでしょうか。

そしてこの物語は、祝福とはいったいそんなに価値のあるものなのか？という疑問も抱かせます。なぜなら、ヤコブはようやく祝福を手に入れますが、その先に待っていたのは、幸せな日々というよりは、大きな苦労の日々だったからです。

ヤコブがずっとあと、年老いて自分の人生を振り返って語る箇所があります。創世記 47章 9節です。「わたしの旅路の年月は百三十年です。わたしの生涯の年月は短く、苦しみ多く、わたしの先祖たちの生涯や旅路の年月には及びません。」

これが父イサクの祝福を引き継いだヤコブの人生なのです。祝福とは、将来に無条件の幸いを保証するようなものではないのです。また、楽して生きられる魔法の杖のようなものでもないのです。そこまでして祝福を奪う必要があったのだろうか、そんな疑問を持ちつつ、でもそれでも、ヤコブに祝福が引き継がれることが、神様の計画だったの

です。

この箇所は、信仰的な正しさを探そうとすると、はっきりした答えが手に入りにくい物語です。神様の計画は予定調和的ではありません。一方で、アタリマエのことがひっくり返されたことの意味は、あまりはっきりしません。ちょっとモヤモヤした気持ちで、読み進めていくこととなります。聖書を読み進める中で、それが解決するときが来るかもしれないし、来ないかもしれない。でもそんなモヤモヤしたものの持ちながら、聖書を読むことも大切なかもしれません。

○リベカが物語を進める

さて、そんな中で、私たちは一つ気づくことがあります。それは、この物語を前に進めている人物の存在です。それはリベカのことです。ここで物語を進めているのは、明らかにリベカなのです。イサクとエサウが密かに祝福を引き継ごうとしているのを見つくと、リベカはそれをヤコブへの祝福に変えてしまうのです。ヤコブが祝福を受けるためのお膳立ても、全部リベカがしています。

このリベカによって進められた物語が、神様の計画を実現させるのです。リベカの存在は際立っていると思うのです。

リベカが物語を進めていく力はいったいどこから来ているのでしょうか。リベカはなにか特別なものを持っていたのでしょうか。みなさんどう思うのでしょうか。

私は、ここに出てくる4人の中で、リベカだけが特別なことがあると思われています。それは自分の故郷を捨てて旅立ってきた人だということです。行く先のことを知らないままに、その身を神様に委ねて歩みだした人。それはこの中ではいまはリベカだけなのです。同じようにして生きたのは、イサクの父アブラハムでした。アブラハムの信仰は、息子イサクより、リベカの方に繋がっているのかもしれない。そしてヤコブはこの後、家を逃げ出すことで、これに続くのです。

アブラハムの旅は神様の招きに応えた旅でした。神様の召命を生きたのです。リベカもそんな人物として描かれているのではないのでしょうか。それがリベカが物語を進める存在になっているのです。そしてそんな神様の召しを受けた人は、社会の常識や当たり前を突き崩す力があるのです。

○常識をひっくり返すできごと

ヤコブが長男の祝福を得るということは、ユダヤの伝統を壊すことです。だからヤコブは兄からも恨まれるし、ヤコブ自身もそれをためらうのです。

ヤコブは言っていました。「もし失敗したら、自分は祝福ではなく、呪いを受けてしまう」。リベカはそんなヤコブに伝えるのです。「そのときは私が呪いを受けましょう」。

世の中の常識にたてつくとき、またアタリマエのことを変えようとするとき、私たちは恐れるのです。間違ったことをしているのではないかと思わされる。ヤコブもそうでした。

でもヤコブは本当に間違ったことをしているのでしょうか。彼は弟だということで、自分で生き方を決められないことに抵抗しているのです。兄に仕えるものにならなくてはいけない。そんな生き方をしたくない、でもそれはできない。

ヤコブはそれに抵抗して、長子の権利を買い取りました。それでも父と兄は勝手に祝福を引き継ごうとしている。結局、少くらの抵抗をしても伝統や常識の前では無力なのです。ヤコブは失敗したときの呪いを恐れています。もしヤコブ自身がそんな無力感に落とされていたとしたら、それこそが呪いだったのかもしれない。この家の中ではどうしても長男と次男の関係はひっくり返せない、そんな呪いの中で、ヤコブは閉じ込められているのです。

呪いとは、人を閉じ込める言葉なのです。呪いは自由に生きることを妨げ、今起きている不公平や、不条理を、そのまま受け入れるしかないものと思わせるのです。それを突き破るには、大きなエネルギーがいるのです。

そんなとき母リベカは言うのです。「そのときは私が呪いを受けます」。それはためらうヤコブの背中を押す言葉でした。ヤコブはそれで前に踏み出します。リベカの言葉はヤコブを呪いから解放する、祝福の言葉に見えます。祝福とは生きる力を与える言葉だからです。

○祝福と呪いの間で

この出来事から、創世記の物語はイサクの時代からヤコブの時代へと移っていきます。新しい一步を踏み出すのは、次はヤコブです。ヤコブに新しい一步を踏み出させるのは、母リベカの言葉なのです。

祝福は人に命を与え、生きる力を与え、解放します。呪いは逆に人を限られた場所に閉じ込めます。そんな祝福と呪いの言葉が飛び交う世界を、私たちも今生きているのです。そんなとき、呪いの言葉を代わりに受け止めてくれる存在があります。そして、生きる力である祝福の言葉を与えてくれる存在があるのです。

みなさんにとってそんな存在とはだれでしょうか。また私たち自身が、誰かのそんな存在になれるでしょうか。わたしたちの教会の交わりが、互いに祝福を与え合う交わりでありたいと思うのです。

祈りましょう。



<p><u>池田バプテスト教会</u> 〒563-0027 池田市上池田 1-2-25 Tel 072-751-9853 礼拝 毎週日曜日 10:30-11:30</p>	<p><u>北豊中教会</u> 〒560-0056 豊中市宮山町 3-19-33 Tel 06-6854-8038 礼拝 毎週日曜日 15:00-16:00</p>
<p>礼拝の様子は各教会のFBページにてライブ配信しています。一週間程度は録画を見ることができまので、御覧ください。</p>	